

動物の代弁者となり彼らにかわって声を上げようと運動するものを社会は『動物愛護団体』と呼ぶ。しかしこの愛護という言葉は実はきわめて曖昧なものだ。例えば、ペットの飼育において犬をかわいがっているゆえに服を着せる人もいるが、それを虐待であると非難する人もいる。『愛護』という言葉の意味



動物との共生を考える
連絡会 山崎 恵子

動物実験代替法の展開

は人それぞれであり、その本質は実に主観的なものでもある。その位置付けを考えると、それは、法が位置付けを考へるといって、それゆえに、ここでは福祉とかがの点が浮上してくるが、そのいう用語を用いる方が適切であろう。福祉には基準を設けること(代替)自体がおそらく動

③ 動物のための代替法

とができ、かつそれが守られているか否かを客観的に評価することもできる。つまり動物実験の現場において動物の扱い、活用方法等に対してその改革を求め、声を上げようとする人は、この福祉が守られているかどうかを基本に活動しなければなら

対立から共通利益追求へ

動物実験を『実施する側』と『反対する側』の協力体制ができて、すいところである。Refinement(苦痛の軽減)およびReduction(数の削減)に関しては何をもつて手法がRefine(向上)したか、そしてどの程度が適切

な「Reduction」の規模である者の双方が『得をする』ということも決して過言ではない。つまり、両者が協力して、資金源を確保できる仕組みを作れば良いのではないだろうか。

代替法の現状を見るとその開発や検証の速度に対して資金という最も大きなモチベーション

本人たちと分かち合うことに対する必要となる。反対運動を展開させている団体は自らのネットワークを使い巨大な市場を握ることができるはず。これは企業にとっては極めて大きな動機付けとなる。

そのためには、従来の『対立する構図』を変えていかなければならない。まず、いまできることも決して不可能であるとは思えない。

が欠けているようである。残念ながら、今の世の流れは金銭、経済性で大きな動きが定まってしまう。代替法の開発が関係者にとって経済的な見返りが大きいという点になれば、事は円滑に進むはずだ。実施者と反対

でも色々な問題が山積している。動物のためにはそれらを早くに解消したいという思いは動物を守ろうとしている団体すべてに共通するものである。しかし、人間のみならず生物の行動を変えていくとする時に最も有効な手段は『陽性強化法』である。悪いものに罰でなく、好ましい行動を報酬で強化していくことが大切だ。